

キリスト教会最大の迫害者サウルが、どのようにしてキリストの使徒となったか、それは使徒言行録9章に描かれています。パウロはこの時の思い出を22章でユダヤ人に証言し、26章ではアグリッパ王の前で証ししています。それによれば、復活のイエスは太陽より明るく輝く天からの強い光として現われ、「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」、また「わたしはあなたが迫害しているイエスである」という声を聞きました。サウルの同行者は強い光は見ましたが、声は聞けませんでした。

パウロはユダヤ人の前では、自分に現われた方が「ナザレのイエス」であると証言します(22:8)。この名前を聞くエルサレムのユダヤ人には苦い思い出となる響きを持った名前だからです。しかしアグリッパ王の前では「イエス」とだけ紹介し、自分が異邦人を救う宣教師であることを付け加えます。異邦人であるアグリッパ王を意識したのでしょうか。

サウルにとって、復活のキリストの顕現とみ言葉、盲目になっての3日間の瞑想、アナニヤによる洗礼と解説は、サウルに多くのことを教えました。それは①、十字架の上に死んだイエスが復活しているのだから、この方は神の子、キリストである。新しい見方で生前のイエスの言葉、行動の記録を収集しなければならない。②、サウルが迫害するクリスチャンを、イエスは「わたしを迫害する」と呼ばれた。従ってクリスチャンの信仰共同体(教会)はキリストの体である。クリスチャンたちの礼拝の中にキリストは臨在されている。③、クリスチャンたちはファリサイ派のように律法を厳守していない。だから救いは律法を守ることによる義ではなく、信仰による。その信仰は人の努力によるものではなく、一方的に与えられるもの。④、従って、救いは割礼を受けたユダヤ人に限らない。神は異邦人とユダヤ人の区別をされない。また自由人と奴隷の区別もない。⑤、死人が復活し、メシア、キリストが到来したのだから、今が終末である。教会は歴史の終末と神の国の到来を宣教する。つまり、後にパウロの福音として展開される神学の骨子はここから始まっているのです。

パウロは回心後「かなりの日数」(使徒言行録9:23)、少なくとも3年間(ガラテヤ1:17,18)はエルサレムへ上っていません。命の危険があったのでしょうか。ペトロたちの指導がなくても旧約聖書に精通していたサウルにとって、「聖書はイエスを証しするもの」という大前提が腹に収まった時、すべてのものがクリアに理解できたのでしょうか。パウロは3年間どこで何をしていたのでしょうか。アラビヤで伝道していたのでしょうか、詳細は分かりません。